

指導と評価の一体化を図る 小学校外国語科授業実践

—「逆向き設計」論を活用して—

川村 一代（皇學館大学）

岡井 崇（鈴鹿市立神戸小学校）

〈要旨〉2020年度から小学校において新学習指導要領が全面実施され、5・6年生を対象に「外国語科」が誕生した。教科となった「外国語科」では「英語を使って○○できるようになる」ことが求められている。すべての児童に「英語を使って○○できるようになる」学力を保障するには、カリキュラムにパフォーマンス課題を位置づけるウィギンズとマクタイの「逆向き設計」論にもとづく授業設計が有効だと考え、6年生を対象に授業実践を行った。「逆向き設計」論の3段階に従い、單元ごとに、①英語を使ってできるようになることを目標（評価規準）として設定し、②目標を達成したかをどう判断するのか（評価基準）を決め、③目標達成へ向かっての指導計画を立てた。授業では、第1時目に目標を具体化した最終形を指導者がデモンストレーションし、当該單元で目指す姿（＝大きな目標）と、それを達成するプロセスを示す毎時の目標（＝小さな目標）、最終形、使用語彙をまとめたプリントを配布し、学習過程の見通しを持たせた。單元目標の達成度を確認するパフォーマンス課題を行う前には、評価内容と基準をルーブリックで示した評価シートを児童に配布し、具体的な評価基準を皆で共有した。児童は上記の手立てにより具体的に学

習の見通しを持ち、自分の考えや思いを表現する語彙や表現を取捨選択しながら小目標を達成し、大目標である自分の意見や考えを表そうと主体的に学習に臨み、英語を使ってできることを確実に増やすことができた。指導者は授業で目指すところがはっきりしていたため、ゴールに向かって迷うことなく、自信を持って指導することができた。

〈キーワード〉 目標、評価、ベンチマーク、改善、学力の保障

1. はじめに

2020年度より小学校において新学習指導要領が全面実施となり、5・6年生を対象に教科「外国語」が誕生した。今回の学習指導要領の改訂で、外国語科では小・中・高等学校を通して「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にしたうえで、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にすることとなった。

教科となった5・6年生対象の「外国語科」においても、「英語を使って何ができるようになるか」を軸に授業を行い、児童の「英語を使ってできること」を確実に増やしていくことが求められている。この点において、コミュニケーションを図る素地となる「外国語への慣れ親しみ」を目的とする3・4年生対象の「外国語活動」とは、一線を画することとなった。「英語を使って〇〇できる」ことを確実に積み上げていくには、ウィギンズとマクタイが提唱する「逆向き設計」論にもとづく授業づくりが効果的と考え、「逆向き設計」論にもとづく授業実践を行った。本稿では、その実践を新三観点に照らし合わせた評価という視点も含めて振り返りたい。

2. 「逆向き設計」論

「逆向き設計」論は、ウィギンズとマクタイによって提唱されているカリキュラム設計論である。「逆向き設計」論では、「リアルな文脈の中で知識やス

キルを使いこなすことを求める課題（西岡，2008，p. 9）である「パフォーマンス課題」をカリキュラムに位置づけることが主張されている。この背景には、ウィギンズが、大人が現実世界で直面するような課題に取り組ませる中で評価することを志向するアプローチである（遠藤，2003，p. 34）「真正の評価」の提唱者であることが挙げられる。外国語科においては、コミュニケーションというリアルな文脈の中で、英語の知識や技能を活用して情報や考え等を伝え合ったりするなど、様々な知識や技能を文脈の中で使いこなすことが求められているため、「逆向き設計」論と親和性が高いと考える。

「逆向き設計」論は、①「求められている結果を明確にする」、②「承認できる証拠を決定する」、③「学習経験と指導を計画する」という3つの段階を経て、カリキュラムや単元を設計することを主張する（西岡，2005，p.16）

（図1参照）¹。教育によって最終的にもたらされる結果から遡って設計すること、また通常、指導が行われた後で考えられがちな評価を先に構想することから「逆向き」と呼ばれている。これを外国語科に当てはめると、①英語を使ってできるようになることを目標（評価規準）として設定し、②目標が達成されたかをどう判断するのか（評価基準）を決め、③目標達成へ向かっての指導計画を立てる、ということになるであろう²。

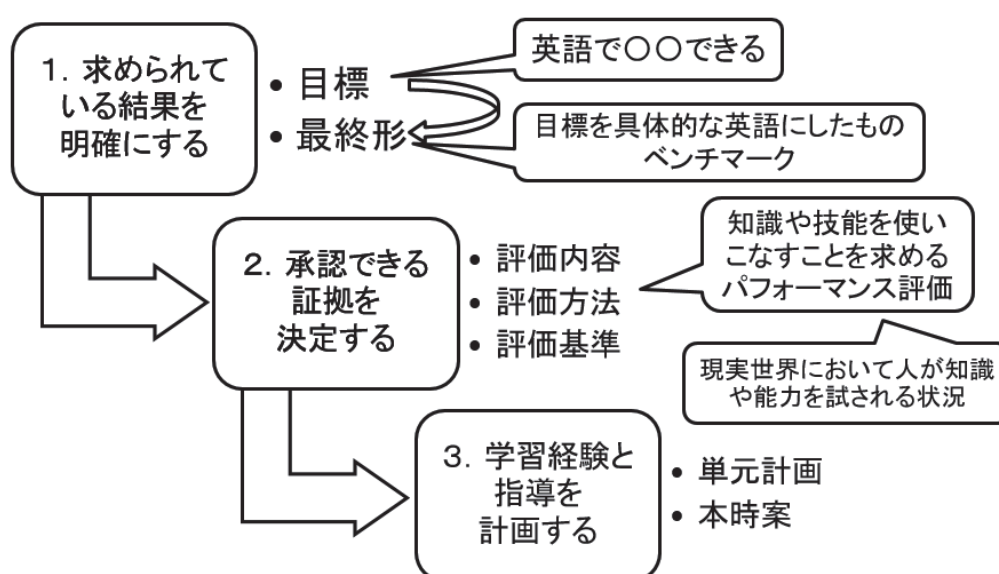


図1. 「逆向き設計」論にもとづく英語授業づくり (G. Wiggins & J. McTighe (2005)).
図表1.1 UbD: 「逆向き設計」の3段階 (p22) をもとに作成)

3. 授業実践

3.1 実践の概要

2019年度、三重大学教育学部附属小学校6年生32人を対象に2019年9月から2020年2月まで「逆向き設計」論にもとづいた授業を設計し、実践した。第二著者は本実践当時同校に勤務しており、2019年11月に開催された全国英語教育研究団体連合会（全英連）第69回三重大会で第二著者が授業実演を行うことが決まった際、三重県教育委員会より第一執筆者に授業改善のための指導助言の依頼があったことが背景にある。なお、本稿の公表については、児童の個人が特定されないよう十分配慮することを確認し、副校長から許可を得ている。

文部科学省小学校外国語教材We Can! 2 を用い、表1に挙げた単元を表の順番で実践した³。本稿では「Unit 5 My Summer Vacation 夏休みの思い出」の実践を紹介する。夏休みの思い出は2020年度から使用されている教科書会社7社の教科書すべてに掲載されており、扱う時期も6年生の2学期の始めで全教科書同じである。どの教科書も「夏休みの思い出」の単元で初めて過去の表現を取り上げており、使用される言語材料もほとんど同じであるため汎用性が高いと考え、本単元の実践を紹介することとした。

表1. 「逆向き設計」論に基づく授業を行った単元

Unit 5 My Summer Vacation	夏休みの思い出
Unit 2 Welcome to Japan	日本の文化
Unit 6 What do you want to watch?	オリンピック・パラリンピック
Unit 7 My Best Memory	小学校生活・思い出
Unit 8 What do you want to be?	将来の夢・職業
Unit 9 Junior High School Life	中学校生活、部活動

3.2 「逆向き設計」論にもとづく単元計画

3.2.1 求められている結果を明確にする

本単元は夏休みの直後に扱うよう設定されており、単元の終末では夏休みの思い出を紹介することが求められている。そこで、本単元の目標は「夏休みの思い出を伝え合おう」と設定され、単元の終末に児童は夏休みの思い出を発表するというパフォーマンス課題に臨むこととした。「夏休みの思い出を

表2. 最終形(ベンチマーク)

My summer vacation was nice / good.
 I went to ~. It was ~.
 I ate ~. It was ~.
 I enjoyed ~. It was ~.
 I saw ~. It was ~.
 Thank you.

伝え合おう」という目標だけでは、夏休みの思い出を伝えるのにどのような英語を使えばよいのかわかりづらい。そこで、外国語科では、目標を具体的な英語で表現し、単元末に児童全員に到達してほしい「最終形」をベンチマークとして設定することを提案したい。本単元の目標表現は、I went to ~. I ate ~. I enjoyed ~. I saw ~. It was ~. であることから、これらを使って表2のようにベンチマークとなる「最終形」を設定した。この「最終形」がB評価となり、指導者は、単元末までに児童全員がB評価に達するように形成的評価を行いながら指導していく。

「最終形」を示すことは型にはめることになるのではないかという批判があるかもしれないが、英語の初学者である小学生は、まだ自由に使いこなせるだけの英語を持ち合わせていない。とりわけ過去形には本単元で初めて出会うため、使える過去形は新出語彙であるwent, ate, enjoyed, saw, wasのみである。本単元では「過去を表すとき」は、今まで用いてきたgo, eat, enjoy, see, isなどとは異なる「過去を表す語を用いる」ということを理解させることが重要と考え、これらの限られた過去形を、意味を理解しながら確実に使うことを全員が達すべき目標とした。なお、本単元で扱う過去形は5つ中4つが不規則動詞である。音声重視で英語を学ぶ児童にとって、不規則動詞はこれまで慣れ親しんできた現在形と語形が大きく異なることから、現在形との違いに音声的に気づきやすいだろうことを配慮しての選択だと思われる。

3.2.2 承認できる証拠を決定する

本単元の目標を「夏休みの思い出を伝え合おう」と定めた後、目標を達成できたかどうかを判断する「評価基準」を設定した（表3参照）。本実践は移行措置期間に行われたため、記録に残す評価は外国語活動の基準に従ったが、翌年から始まる全面実施後を見据え、新学習指導要領（文部科学省，2018）にもとづく評価を形成的評価として試験的に取り入れた。評価観点は、夏休みの思い出の内容を英語で表現できていたかという「内容」と、それを他者に伝わるように表現できていたかという「伝え方」の二つを設定した。「内容」はさらに「情報量」と「英語」に分けた。これらの分け方は、児童が理解しやすいよ

表3. 夏休みの思い出 発表(内容・伝え方)チェック表

	発表(内容)		発表(伝え方)		
	情報量	英語	声	目線・態度	資料の示し方
S	夏休みに行ったところ、食べた物、楽しかったこと、見たことと、それぞれの感想に2カ所以上付け加えて発表している	正しい英語で言えている(まちがいは1カ所まで)	相手の反応を見ながら、はっきりと相手に聞こえる声で全部すらすらと言え	聞き手に目を合わせて、堂々と発表している	話に合わせて、タイミングよく、指差しや拡大をして、効果的にタブレット端末を使っている
A	夏休みに行ったところ、食べた物、楽しかったこと、見たことと、それぞれの感想に1カ所付け加えて発表している	正しい英語で言えている(まちがいは2カ所まで)	止まったりしながらも(3回まで)、はっきりとみんなに聞こえる声で全部言える	原稿ところどころ目を落としながらも、聞き手に目を合わせながら発表している	話に合わせて、指差しや拡大するなど、タブレット端末を使っている
B	夏休みに行ったところ、食べた物、楽しかったことと、それぞれの感想を発表している	正しい英語で言えている(まちがいは4カ所まで)	止まったりしながらも、みんなに聞こえる声で最後まで言える	原稿に目を落としながらも、半分以上聞き手に目を合わせながら発表している	話とタブレット端末の画面が合っている
C	夏休みに行ったところ、食べた物、楽しかったことと、それぞれの感想が全部言えない	正しい英語で言えていない(間違いが5カ所以上)	最後までいかず、何と言っているのか聞こえない	聞き手を見ず、原稿を見て発表している	話とタブレット端末が合っていない

うにという観点から決められた。「情報量」は主に新学習指導要領の観点別学習状況の「思考・判断・表現」、「英語」は「知識・技能」、「伝え方」は「主体的に学習に取り組む態度」に対応している。

児童は、単元末に、単元を通して蓄積する最終形を使い、語彙を選択して自分の言いたいことを表現した。「内容」の「情報量」については、夏休みに、①行ったところ、②食べた物、③楽しかったこと、④見たこととそれぞれの感想に、語でも表現でも構わないので1カ所以上自分で考えた語句や表現を加えていけばA、①②③とそれぞれの感想が言えればB、①②③とそれぞれの感想が言えなければCと設定した。「自分で考えた語句や表現」というのは児童が発表の内容をより伝わりやすくするため、「思考・判断・表現」したかどうかを見るポイントである。語であればveryが加わっている、It wasのあとの感想が1語ではなく2語になっている、表現であればI like ~.などの既習表現が加えられているということが例として挙げられる。なお、今回は児童の意欲を高め主体性を引き出すため、A基準の上にあたるSランクを加えた。評価はA, B, Cの三段階であるためSはAと同等である。B基準は全員が達成すべき基準であるので児童の負担を考え、①②③と重複する可能性がある「見たこと」は対象外とした。「内容」の「英語」では英語の正確さを評価し、間違いが2カ所までならA、間違いが3～4カ所ならB、間違いが5カ所以上ならCとしたが、これら基準となる数字は児童の実態に合わせ、各授業者が設定する。

「伝え方」は、「声」「目線・態度」「資料の示し方」に分け、これらの要素は英語ではなく態度であることから、観点別学習状況の「主体的に学習に取り組む態度」として評価した。本実践では「声」は、はっきりとみんなに聞こえる声で、止まったりしながらも全部言えるのがA基準とし、止まるのは2回までとした。このように誰もがわかる評価基準を設けることで、児童は具体的にどこをどう改善すればよいのかがわかり、自分の発表を改善しようと主体的に学習に取り組む姿が見られた。こういった学習態度は「主体的に学習に取り組む態度」の「粘り強い取り組み」と「自己調整力」を評価する判断材料となる。具体的な評価基準の設定は指導者にとってもわかりやすく、信頼性の高い公平な評価につながった。

3.2.3 学習経験と指導を計画する

本単元の目標と評価基準を設定した後、指導計画を立てた（図2参照）。毎時の授業では学習プロセスを具体的に表す「小さな目標」を設定し、「小さな目標」を一つずつ達成していくと「大きな目標」が達成できるようにした。第

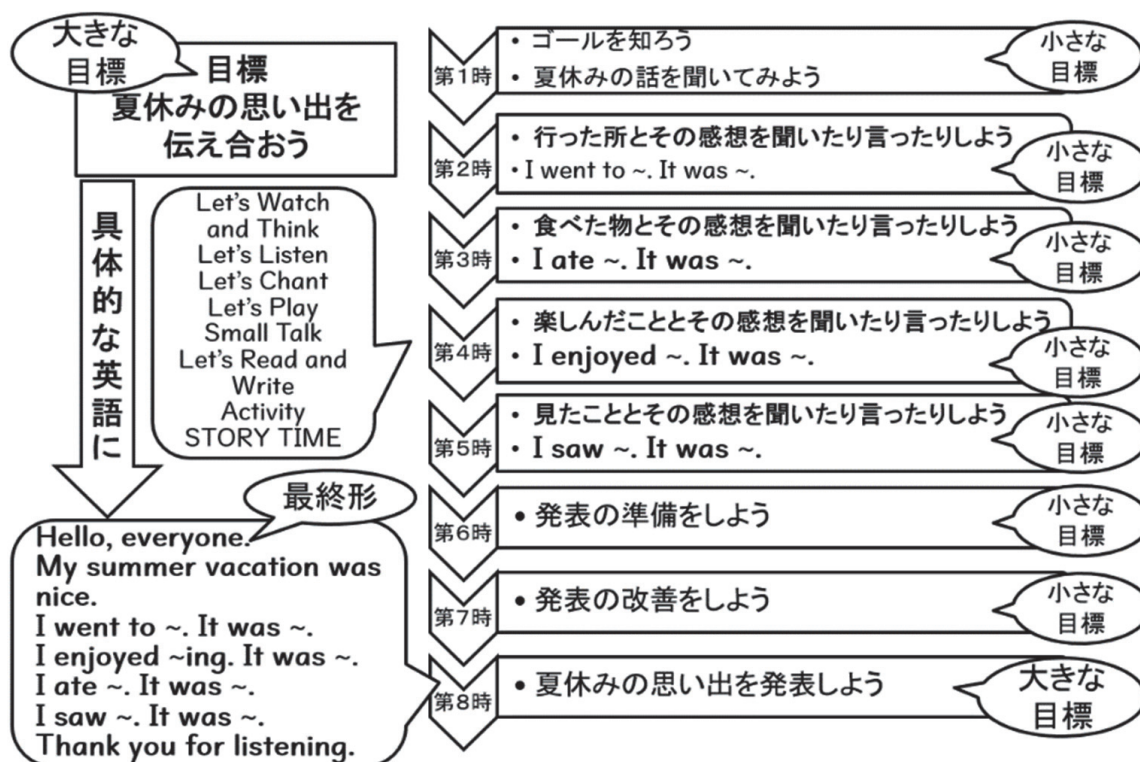


図2. 逆向き設計の目標・最終形・単元計画

1 時では単元ゴールをクラスで共有し、第2時には I went to ~, It was ~、第3時には I ate ~, It was ~、第4時には I enjoyed ~, It was ~、第5時には I saw ~, It was ~、という表現を聞いたり言ったり読んだり書いたりする中で、「過去のことを伝えるには過去を表す語を使う」ということに気づき、過去を表現するのにそれらの表現が使えるようになってほしいという意図を持って単元計画をデザインした。

3.3 授業実践

第1時は、本単元の学習の見通しを示すため、「ゴールを知ろう」を目標とし、指導者の夏休みの話を児童に聞かせた。挨拶をした後、指導者である学級担任と専科教員が夏休みの思い出について英語で話した（表4参照）。このとき児童はまだ過去を表す英語については何も知らなかったが、その日が夏休み直後の9月4日であり、地名や食べ物が出てきたことから、夏休みに行った所やそこで食べた物など夏休みの思い出について話していたということを、よく理解

していた。実際のコミュニケーションでは、自分の知らない語句や表現が使われていることが多々ある。未習の表現を含む対話を聞かせることは、自分の知らない語句や表現があっても、場面や状況、文脈から意味を推測して聞くという、実際のコミュニケーションで求められる聞き方を体験する機会となる⁴。表4のデモンストレーションを聞かせながら “Where did you go?” “Did you go to Ise?” “How about you? Did you go swimming?” 等児童とやり取りを行った後、指導者は「この単元の目標は何だと思いますか」と聞いたところ、児童は「夏休みの思い出を英語で言えるようになること」と答えた。指導者は、「この単元の最後には、

表4. 第1時のTeacher'sTalk(H=学級担任 J=専科教員)

H: Hi, J sensei. Today is September 4th. Summer vacation is over! I went to Gujohachiman. It was fun.
J sensei, how about you?
J: I went to Ise. It was fun.
H:(児童に)How about you?
H: I ate sausages and Takayama ramen in Gujohachiman. It was delicious. J sensei, how about you?
J: I ate Ise udon. It was delicious.
H:(児童に)How about you?
H: I enjoyed shopping (食品サンプルの写真を見せて) in Gujohachiman. It was cute. J sensei, how about you?
J: I enjoyed shopping, too. (赤福の写真を見せて) It was sweet.
H:(児童に)How about you?

(下線部は最終形で使われている表現)

夏休みの思い出をクラスみんなに英語で伝えられるようになりましょう」と言い、単元目標を児童と共有した。

この後、指導者は「単元を見通すワークシート」（付録参照）を配布した⁵。「単元を見通すワークシート」には、「大きな目標」「小さな目標」⁶「最終形」「使用語彙」⁷が掲載されており、単元で学習する内容がすべてわかる仕組みとなっている。このワークシートを第1時に配布することにより、児童は単元の見通しを持って主体的に学習を進めることができた。ワークシートを授業が始まる前に見て、「今日は食べた物について話すんだ。何を食べたかなあ」「今日は楽しんだことか。何を話そうかな」など、授業に主体的に取り組もうとする姿が見られた。指導者はワークシートを見れば当該単元で何が求められているかが一目でわかるため、目標達成に向かってポイントを押さえて指導するのに役立った。「単元を見通すワークシート」をもとに、指導者は小さな目標で達成したことを毎時の板書でも蓄積していった（写真1参照）。



写真1. 大きな目標達成に向かって学習を可視化する板書(第2～5時)

第2時から5時までは、それぞれ「行った所とその感想を聞いたり言ったりしよう」「食べた物とその感想を聞いたり言ったりしよう」「楽しんだこととその感想を聞いたり言ったりしよう」「見たこととその感想を聞いたり言ったりしよう」という毎時の目標のもと、Small Talk⁸やWe Can! 2のLet's Watch and Think, Let's Listen, Let's Chant, Let's Play, Let's Read and Writeを活用し

て、過去を表す表現に慣れ親しんだ。音声を聞いて過去を表す表現に気づき、語を選択して過去に行った所や食べた物などについて友達と伝え合った後、文部科学省のWe Can! 2のワークシートに手を加えたものを使って、音声で慣れ親しんだ語句や表現から自分に即した文を書き写し、過去を表す文を書き溜めていった。毎時のワークシートに書き溜めていった文は最終形を踏まえてはいるが、各児童オリジナルの内容となっていき、第6時に発表原稿を作成する際に活用された。

振り返りでは、その日の授業で学んだこととともにわからなかったことも書くよう児童に指示し、児童にとっては自らの学習状況を把握する機会、指導者にとっては指導改善のための形成的評価の機会とした。児童からの質問や明らかな誤りは、前時の復習として次時の最初に示すようにした。児童からは「〇〇は英語で何と言いますか」という質問が多く寄せられ、これからもよく使うであろう語句や表現はクラス全体でシェアした。「お土産は英語で何と言いますか」という質問が寄せられた時は、「お土産」という英単語を一語教えるより、具体的に買ったものを言う言い方を教える方が汎用性に富むと考え、I bought ~.という表現を紹介した。お土産は誰かのために買うものなので「誰かにあげるのならI bought ~. It was a present.とかIt was for my grandfather and grandmother.と言えばお土産の意味が伝わるね」と「お土産」という言葉を知らなくても、発想を換えると言える英語が増えるということを暗に示した。なお、I bought ~.という表現は、この後多くの児童が使っていた。

第6時の目標は「発表の準備をしよう」であった。まず、今まで書き溜めたワークシートにある文を使い、スピーチ原稿を作成した。その後一人一台タブレット端末を活用して児童は発表資料を作成した。各自インターネットに接続し、使いたい画像をタブレット端末に取り込んだ。このときはタブレット端末を使って発表資料を作成することが初めてだったため時間がかかったが、慣れてくると15分もあれば発表資料を作れるようになった。発表資料を作成させる際、絵を描かせると時間がかかり、能力差が生じる。高学年になると自分の絵に自信がなく見せたがらない児童も多い。また、せっかく作成した絵が小さくて後ろの方の席の児童に見えないということもある。タブレット端末を使うこ

とによって発表内容に合致した発表資料を作成でき、発表のとき大画面モニターに発表資料を映すと後ろの席の児童を含む全員に発表資料がよく見える（写真2参照）。



写真2. 大画面モニターに映した発表資料

第7時の目標は「発表を改善しよう」であった。まず学級担任が自分の夏休みの思い出として最終形を使った発表を行った。写真3の白い短冊の英文が、指導者が話した英語である。そして、“Good points, please.”と言って、発表で良かった点を児童に挙げさせた。これは、指導者の発表で良かった点を児童の発表にも取り入れてほしいという思いと、後に友達を発表を聞いた時にしてほしい反応を見せるという意図を持って行われた。児童からは“Big voice.”や “Nice smile.” 「It was delicious. という言い方は実感がこもっていてよかったです」というような声が挙がった。次に “Make my presentation better.”と言って、黒板に「改善」と書いた。その後、“Questions, please.”と言って、指導者の発表を聞いて児童がもっと知りたいと思ったことを尋ねさせた。児童からは、「誰と行きましたか。」 “What ramen?” 「何を買いましたか。」というような質問が出され、指導者はそれらの質問に英語で答えながら、新たな情報を黒板に書き加え（写真3参照）、発表内容の改善の仕方を示した。指導者がさらに “Make my presentation better.”と言ったところ、児童から「mountainsの前に beautifulを入れたらどうですか」「It was beautiful.にvery

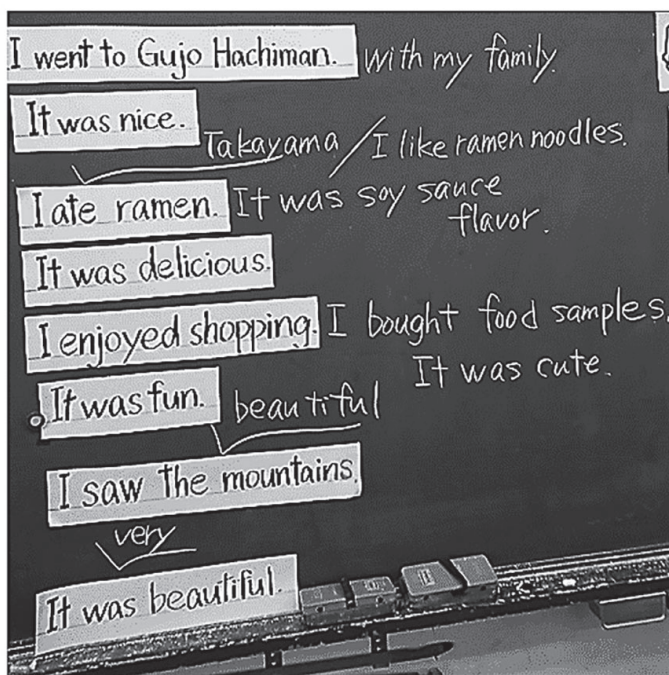


写真3. 指導者の発表原稿と児童からの改善の提案

を足してIt was very beautiful.にした方が気持ちがよく伝わりませんか」というような意見が出され、それらも改善に反映させた。児童から一通りの意見が出たあと、指導者は児童の意見をもとに改善させたバージョンの発表を行った。この後、指導者は「評価シート」（表3参照）を児童に配布し、発表の評価基準をクラス全体で共有した。児童は指導者が示した例と評価シートを見ながら、自分の発表原稿に改善を加えた。

発表原稿を改善して原稿を完成させた後、児童はペアになり、お互いの発表の様子をタブレット端末で撮影し合った（写真4参照）。撮影し合う前、指導者は児童に「どんな点に注意して発表すればいいですか」と質問した。児童からは「大きな声ではっきりと発表する」「原稿ばかり見ず、相手を見てアイコンタクトを取りながら発表する」「資料に指さしをしたりする」という答えが返って来、相手に伝わるよう他者意識を持って発表することが確認された。ペアでお互いの発表を撮影した後、児童は自分の発表の動画を客観的に見て、自分の発表を改善するにはどこをどう変えればよいかを考えた。その後パートナーを替え、各自改善点を意識しながら2回目の撮影に臨んだ。2回目の撮影後、指導者は児童に改善ができていたか尋ねた。この活動は「主体的に取り組む態度」の「粘り強い取り組み」と「自己調整力」の育成を狙って行われた。最後に原稿に手を加えて言語面で改善したところと撮影を通してコミュニケーション面で改善したところをクラス全体で振り返り、第7時を終えた。



写真4. 端末を使って発表する児童とその様子を撮影する児童

に伝わるよう他者意識を持って発表することが確認された。ペアでお互いの発表を撮影した後、児童は自分の発表の動画を客観的に見て、自分の発表を改善するにはどこをどう変えればよいかを考えた。その後パートナーを替え、各自改善点を意識しながら2回目の撮影に臨んだ。2回目の撮影後、指導者は児童に改善ができていたか尋ねた。この活動は「主体的に取り組む態度」の「粘り強い取り組み」と「自己調整力」の育成を狙って行われた。最後に原稿に手を加えて言語面で改善したところと撮影を通してコミュニケーション面で改善したところをクラス全体で振り返り、第7時を終えた。

第8時は児童全員が夏休みの思い出の発表を皆の前で行った。各自の発表の前に指導者は児童のタブレット端末とテレビモニターをケーブルで接続し、児童は画面に映った発表資料を示しながら夏休みの思い出の発表をした（写真5参照）。発表者が交代する間に、他の児童は発表者に対する一言感想を書いた。写真5は発表の様子である。発表内容は平均的なもので、クラスの4分の3以上の児童がこの発表と同等の発表を行った。写真5の児童は最終形にDo

you like Yatsuhashi? I like Yatsuhashi.という既習表現を活用したオリジナルの文（下線部）を二つ入れており、間違いも無く、声もよく聞こえ、アイコンタクトもあり、資料もうまく使っていたため、評価基準に照らし合わせ、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的

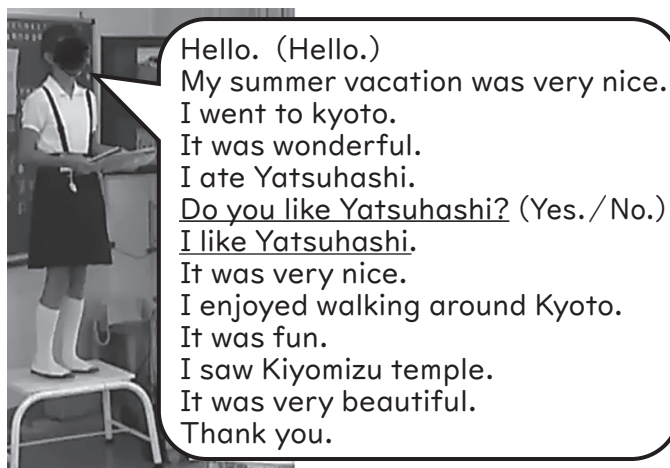


写真5. 発表する児童の様子と発表内容

「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」とも評価はAであった。なお、発表内容のカッコ内のHello.やYes./No.は、発表を聞いていた児童からの反応ある。常に他者意識を持ち、相手が言ったことには反応するよう指導してきた成果が確認できる。

写真5の児童は白い台の上に乗って発表している。この台はポートボールのキーパー台である。画面を指し示すには画面が高いこと、また、これ以前に普通に床の上で発表させたところ、ふらふら動いたりする児童がいたため、ポートボールのキーパー台の上で発表させることにした。キーパー台は安定していて安全である。キーパー台の上で発表させるようになってから、児童の発表時の姿勢が良くなった。児童はキーパー台を小さな舞台と捉えていたようで、発表者としての特別感や自覚を持ちながら発表するという効果もあった。

クラスの大半の児童が、最終形に各自工夫したオリジナルの語や文を入れた発表ができ、A評価を得た。本単元を通して、児童はwent, ate, enjoyed, saw, wasという過去を表す語を聞いたり言ったり読んだり書いたりして、過去を表すときは過去を表す語を使うということを理解したようであった。このことは、毎時のSmall Talkで行った所や食べた物の話をしていたときに過去形が使われていたことから確認できた。

3.4 児童の変容

9月に「逆向き設計」論にもとづく授業を始めてから、指導者はワークシートや振り返りシートで個々の学習の成果と課題を把握することにより、的確な

助言を与え、個に応じた指導を行うことができるようになった。その結果、児童は「英語で〇〇できること」を確実に増やしていき、英語が聞けるように、話せるようになってきた自分に気づき、授業に手ごたえを感じたようであった。Unit 5, Unit 2, Unit 6を終えた11月半ばごろ、児童に2学期の英語の授業の感想を書いてもらった。以下は児童の記述を原文のまま抜粋したものである。

- はじめは英語に苦手意識があったけど、自信がついて楽しく感じるようになりました。
- 毎時間、どんどん英語ができるようになりました。今では聞いたことに質問したり、質問の答えなどがいえるようになりました。
- 授業を受けて、ためになったと思いました。授業はおもしろくて、分かりやすかったです。
- ぼくは英語を聞くのも話すのも書くのもきらいでした。（中略）けれども、単語だけでしゃべっていた英語が文でしゃべれるようになって英語が好きになりました。
- わたしは英語が好きな人にどこがおもしろいのか教えてほしいほど英語がきらいでした。でも今はどこがおもしろいのが分かります。新しい単語や文を見つける喜びは、まるで探検家になって宝物を見つけたようなうれしさでした。

児童の変容は、指導者にもはっきりとわかった。「逆向き設計」論にもとづく授業を始めてから、ほとんどの児童がA評価の発表ができるようになった。また、1学期はペアでSmall Talk⁸をさせても1～2往復の対話ですぐに終わってしまっていたが、2学期になってSmall Talkが1分間以上続くようになった。学年末には、指導者が止めるように指示するまで、いつまでもSmall Talkを続ける姿が見られた。授業以外でも、「次の英語の授業のSmall Talkは何が話題かな」と英語の授業を楽しみにする姿が見られたり、給食の挨拶や朝のスピーチを英語でしようという声が挙がったりし、児童が主体的に英語を使おうとする姿が学校生活のあちこちで見られた。

4. まとめ

「逆向き設計」論にもとづく授業を始め、目標と評価を具体的に設定して単元計画を立てるようになってから、指導者は当該単元で指導する目標と言語材料はもちろん、既習事項との関連や系統性がわかるようになり、迷いなく授業を行えるようになった。このことは2020年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため4・5月が臨時休校となり、1学期の英語の授業時数が年間計画通り確保できなかったときに改めて実感された。単元の目標と評価を設定して毎時の目標を立てれば、重点的に指導すべきことがわかり、教科書や指導書をなぞる指導ではなく、目標に照らし合わせて教科書の内容を取捨選択して教科書を活用する指導を行うことができる。

「逆向き設計」論にもとづく授業を始めるようになってから、「大きな目標」に到達するため、毎時間「小さな目標」を効率的に設計する大切さも感じた。児童は一つ一つ目標を達成することにより大きな目標に近づいていくのがわかるため、達成感を感じながら学習を進めることができた。

「逆向き設計」論にもとづく授業を行い、単元のゴールを児童と指導者が共有したことにより、児童はゴールを目指した主体的な学びができ、指導者はゴールを目指した計画的な授業ができるようになった。その結果、児童は「英語で〇〇できること」を確実に増やしていくことができた。「逆向き設計」論にもとづく英語授業は、「学力の保障」を確実なものにしてくれると感じている。

注

1. 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センターの『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校 外国語・外国語活動』でも、評価の進め方として、「1. 単元の目標を作成する→2. 単元の評価規準を作成する→3. 指導と評価の計画」を作成するとしている。
2. 「逆向き設計」論では「求められている結果（＝目標）」を設定する際、特に重点的に扱う目標として、単元を通して探求する「本質的な問い」と対応して身につけさせ

指導と評価の一体化を図る小学校外国語科授業実践（川村・岡井）

たい「永続的理解」を明確にする（西岡，2008）ことが有効だと考えられている。Unit 5の「本質的な問い」は、「過去の出来事を英語で表現するにはどうしたらいいだろうか」であり、「永続的理解」は「過去の出来事を英語で表現するには過去を表す語を使う」となる。

3. 学校行事の関係で年間計画においてUnit 2をUnit 5の後に行うことになっていた。
4. ただし、場面・状況設定を工夫したり、絵や写真等視覚的補助を取り入れたりして、児童が意味を理解できるようにすることが重要である。
5. 本実践の後、「単元を見通すシート」は、第1時ではなく、第2時に示す方が、児童の主体性を促すということが分かってきた。第1時に指導者が「単元を見通すシート」を配布すると、児童は指導者に押し付けられたと感じるようである。第1時に、本単元の目標は何か、それを達成するにはどうしたらよいかを児童に問いかけ、児童の意見を引き出した上で、第2時に「単元を見通すシート」を配布すると、受け入れられやすくなり、より主体的な学びにつながるようである。
6. ワークシートの「小さな目標」は学習者用に学習のプロセスがわかるように記述するため、指導者用の指導計画における記述と多少異なることもあり得る。
7. 付録にある「単元を見通すシート」の2ページ目の「使用語彙」部分は、絵カードの著作権の関係で割愛した。
8. 本実践におけるSmall Talkの指導については、川村一代（2020）「外国語（英語）科におけるSmall Talkの指導 ～小学校での実践と中学校への提言～」『皇學館大学紀要』第58輯を参照されたい。

謝辞

本実践及び本稿執筆にあたり、三重県小学校英語教育研究会顧問鷹巣雅英氏に、多大なるご協力とご助言をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- 遠藤貴広（2003）. 「G. ウィギンズの教育評価論における『真正性』概念－『真正の評価論』に対する批判を踏まえて－」『教育目標・評価学会紀要』第13号, 34-43.
- 文部科学省（2018）. 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語

指導と評価の一体化を図る小学校外国語科授業実践（川村・岡井）

編』東京：開隆堂.

西岡加名恵（2005）. 「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」『カリキュラム研究』第14号, 15-29.

西岡加名恵編著（2008）. 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』東京：明治図書出版株式会社.

Wiggins, G., & McTighe, J. (2005). *UNDERSTANDING by DESIGN, Expanded 2nd Edition*. Association for Supervision and Curriculum Development (ASCD). [西岡加名恵（訳）（2012）『理解をもたらすカリキュラム設計 — 「逆向き設計」の理論と方法』東京：日本標準]

付録：単元を見通すワークシート(1ページ目)

Unit 5 Summer Vacation

2019年 月 日 () Name _____

ゴール：夏休みの思い出を伝え合おう

- ① 夏休みの話を聞いてみよう
- ② 行った所とその感想を聞いたり言ったりしよう
- ③ 食べた物とその感想を聞いたり言ったりしよう
- ④ 楽しかったこととその感想を聞いたり言ったりしよう
- ⑤ 見たものとその感想を聞いたり言ったりしよう
- ⑥ 発表の準備をしよう
- ⑦ 発表を改善しよう
- ⑧ 夏休みの思い出を発表しよう

Hello.

My summer vacation was nice / good.

I went to 場所 .

It was 感想 .

I ate 食べ物 .

It was 感想 .

I enjoyed 行動 .

It was 感想 .

I saw 場所・景色 .

It was 感想 .

Thank you.

指導と評価の一体化を図る小学校外国語科授業実践（川村・岡井）

A Practical Report of an Elementary School English Class
Based on the "Backward Design" Teaching Methodology

Kazuyo KAWAMURA

Kogakkan University

Takashi OKAI

Kanbe Elementary School, Suzuka, Mie

Abstract

The new National Curriculum Standards have been fully implemented in elementary schools since 2020 school year, and a new subject called “Foreign Language” has been introduced in grades 5 and 6. In the “Foreign Language” class, students are expected to steadily increase what they can do with English. In order for all students to acquire the ability to communicate in English, we decided that a lesson design based on Wiggins and McTighe’s “Backward Design” theory, which places performance tasks in the curriculum, would be effective, and we conducted classes for sixth-grade students based on the “Backward Design” theory. Following the three stages of the theory, (1) a goal was set for each unit, (2) evaluation criteria were determined, and (3) an instructional plan was developed. In class, the teachers demonstrated the performance set as the benchmark in the first hour. The teachers then distributed a handout summarizing the goal of the unit (i.e., the major goal), hourly goals indicating the process of achieving the major goal (i.e., the minor goal), the benchmark, and the vocabulary to be used in the unit in order to give the students a perspective of the learning process. Prior to the performance task to check the achievement of the unit goal, an evaluation sheet with a rubric of evaluation contents and criteria was

distributed to the students, and the specific evaluation criteria were shared with all the students. Through the above measures, the students were able to have a concrete outlook on the learning process, and by achieving the minor goals, they were able to express their opinions and thoughts, which was the major goal, and steadily increased what they were able to do using English. The teacher also had clear goals for the class, so he was able to lead the students confidently and reliably toward the goals.

Keywords : objective, evaluation, benchmark, improvement, competency - based education